

トルコ共和国ハック・タールク・ウス図書館所蔵
オスマン語定期刊行物資料のデジタル化作業について

新井政美

ハック・タールク・ウス (Hakkı Tarık Us) は、オスマン帝国末期からトルコ共和国期まで生きた著名なジャーナリストである。1889年に生まれたハック・タールクは、イスタンブール大学で法学を学び、師範学校やガラタサライ・リセで教えたあと、ジャーナリズムの道へ入った。『時』(Vakit) 紙を代表してローザンヌ講和会議の取材に参加したアースム・ウス (Âsım Us) は、彼の五つ上の兄だった。共和国成立後は兄よりひとあし早く大国民議会の議員に選出され、政治活動にも積極的に参加したが、同時に1877年に開会された最初のオスマン帝国議会の議事録を刊行するなど、学問的な面での活躍も目立った。

その、学問にも関心をもった政治家兼ジャーナリストのハック・タールク・ウスは、生前膨大な数の書籍を収集したことで知られていた。そして死後、その蔵書はイスタンブールのベヤズト地区にある、旧メドレセの一建造物に移され、そこで研究者の閲覧に供されていた。ハック・タールクの蔵書は多岐にわたっていたと思われるが、その中でも特に、オスマン時代、および1928年の「文字革命」以前の共和国期にアラビア文字によって印刷刊行された新聞・雑誌のコレクションには定評があり、Alexandre Bennigsen et Ch. Lemerrier-Quelquejey, *La presse et le mouvement national chez les musulmans de Russie avant 1920*. (Mouton, 1964), Hasan Duman, *İstanbul Kütüphaneleri Arap Harfli Süreli Yayınlar Toplu Kataloğu 1828-1928*. (İRCİCA, 1986), *Eski Harfli Türkçe Süreli Yayınlar Toplu Kataloğu*. (Milli Kütüphane, 1987)などにおいて、その蔵書内容の豊かさの一部が知られていた。筆者自身も、1979年から2年にわたる留学時に、オスマン帝国末期の定期刊行物の多くを同図書館で閲覧した覚えがある。

しかしながら、ハック・タールク・ウス図書館の蔵書の全体については、誰も知るころがなかった。個人の図書館であったため、カード目録に記載があっても行方不明になっている雑誌も多々あった。さらに目録と蔵書番号の付け方にも一貫性がなく、上記三書のうち、唯一番号をつけて同図書館の蔵書を紹介している Hasan Duman 編の目録も、その番号の信頼性は高くなかった（高くないのは目録ではなく、ハック・タールク図書館の管理の信頼性だった）。しかも、財政難等を理由に同図書館はこの十数年来閉鎖されていた。オスマン、並びにトルコの近現代史、および文学史を研究する上で非常に重要な資料が、研究者に閉ざされていたのである。同図書館のこの状態を悲しみ、再開を望む声はトルコ内外で高かったが、仮に再開されても、酸性紙問題もあって、それがどれだけ実際に研究者に利用されるかを危ぶむ声も出る状態であった。

そこで、「21世紀COEプログラム、史資料ハブ地域文化研究拠点」の事業の一環として、ハック・タールク・ウス図書館に所蔵されるオスマン語定期刊行物のデジタル化が構想された。同図書館が2003年に入ってトルコ共和国文化観光省の所管に入り、蔵書すべてが同じ

ベヤズト地区にある国立図書館へ移されたため、交渉は文化観光省次官のムスタファ・イセン氏との間で行なわれた。数回にわたる手紙とメールのやりとりの結果基本合意に達したので、筆者は8月25日に文化観光省イスタンブル事務局局長ネジデト・ギュルゲン氏と最終交渉を行ない、協定書に調印した。

この協定に基づき、具体的な作業が開始された。まず、ハック・タールク・ウス図書館に所蔵されていた資料の全体像を把握することから始めねばならない。同図書館にどれほどの資料が蔵されていたかは誰にも分からないことで、そこから始めねば、デジタル化も不可能と判断された。筆者は8月に国立図書館で資料の状況を瞥見したが、定期刊行物と図書、オスマン語刊行物とトルコ語刊行物が混在し、ほとんど收拾のつかない状態にあることが判明した。そこで、オスマン近代史を専攻し、同時期の定期刊行物にも詳しい若手研究者二名と、図書館司書の資格を持つもの一名に業務を委託し、資料の分類整理、目録作成事業を始めることとした。同図書館の目録が作成されるだけでも、オスマン史、トルコ史研究への貢献は小さくあるまいと思われる。

以下、2003年12月に業務を委託した三名から提出された作業報告に基づき、事業の見通しを述べてゆきたい。

1. 蔵書の分量

幅90-100センチの書棚650段、および55×37×35センチの段ボール箱125箱。

2. 行なわれた作業

1 書棚に配架されたものを図書と定期刊行物とに分類しつつ再配架。

2 段ボール中の資料を分類しつつ配架。図書はおよそ300段に、背表紙に張られた番号を生かして配列。

3 定期刊行物はおよそ1,400~1,500種あると思われる。現在900種ほど、冊数にして1,500~2,000冊を同じ名前の刊行物をひとまとめにする形で整理。このうち、750冊ほどはブランケット版の新聞である。整理された資料には改めて番号がつけられ、二台のパソコンに入力されている。入力済みの刊行物はおよそ500種ほどである。

4 整理分類と、目録作成は2004年2月に終了する見込みである。

筆者たちが最終的にデジタル化を目指すのは、ハック・タールク・ウス図書館の心臓部と言えるオスマン語の定期刊行物であるが、図書とトルコ語（ローマ字）の資料も目録が作られれば、同図書館の資料が国立図書館内で研究者に公開された際に大いに役立つだろうと期待されている。

4月以降は、デジタル化のための撮影作業に入る予定である。